【別紙２】

論文名：The features of masticatory behaviors in older persons with oral hypofunction　　口腔機能が低下した高齢者の咀嚼行動の特徴（要約）

新潟大学大学院医歯学総合研究科
氏名　畑山　千賀子

【目的】
口腔機能の低下（口腔機能低下症）は，摂取可能な食物の多様性の低下，食事量の減少により低栄養や要介護状態につながるのではないかと考えられている．しかし，咀嚼機能等の機能面の評価は多数行われているものの，咀嚼回数をはじめとする咀嚼行動について関連を調査した報告はほとんど見られない．本研究では，地域在住高齢者を対象に，口腔機能と咀嚼行動との関連について検討し，口腔機能が低下した高齢者の咀嚼行動の特徴を明らかにすることを目的とした．
【方法】
対象はＭ市在住の地域在住自立高齢者 98 名（男性 33 名，女性 65 名，平均年齢 74.8±6.3 歳）とした．各対象者に対し，口腔機能低下症の７項目（口腔不潔，口腔乾燥，咬合力低下，舌口唇運動機能低下，低舌圧，咀嚼機能低下，嚥下機能低下）を評価した．また，おにぎり 1 個（100g）を全量摂取させ，シャープ社製咀嚼回数計 bitescan®を用いて咀嚼行動（咀嚼回数，一口あたり咀嚼回数，咀嚼テンポ，摂取時間）を計測した．口腔機能低下症ならびに各下位症状の診断基準により対象者を２群に分け，咀嚼行動を Mann-Whitney U 検定を用いて比較した．さらに，咀嚼能率と咀嚼回数との関連を Spearman の相関係数を用いて検討した．
【結果】
口腔機能低下症該当群は非該当群と比べて有意に咀嚼テンポが遅かったが，咀嚼回数や摂取時間には違いを認めなかった．下位症状別では，舌口唇運動機能低下該当群は非該当群と比べて有意に咀嚼テンポが遅かった．また，低舌圧該当群は，非該当群と比較して有意に咀嚼回数が少なく，摂取時間が短かった．一方で，咀嚼能率と咀嚼回数の間には有意な相関関係を認めなかった．
【結論】
以上より口腔機能低下症（特に舌口唇運動機能低下）を有する高齢者は巧緻性の低下により咀嚼テンポが遅くなっていることが示された．また，舌筋力低下は，口腔内での食塊形成に影響を与えており，咀嚼回数や摂取時間が延長していることが考えられた．一方，高齢者において口腔機能や咀嚼機能が低下しても，代償的な咀嚼回数の増加は認められず，窒息の危険性や消化・栄養吸収に影響を与える可能性が示唆された．